

留学は若いうち?(3月レポート)

山本 裕之

3月5日は二十四節気の「啓蟄」。路面には少し前に降った雪が残っていました。この時点では服装もまだ冬、啓蟄を過ぎると徐々に気温が上がり3月中旬からは一気に春になりました。3月末の日中の気温は25度。モクレンや桜が咲き、柳が芽吹き、鳥のさえずりが聞こえます。

気温的には大変過ごしやすいのですが、花粉症の自分にとってはつらい時期になりました。あれ、中国ってもしかして花粉症がないの?と喜んでいたら急激に襲ってきました。黄砂も影響して、結局日本と変わらない花粉症シーズンになりました。黄砂については、これからもっと酷くなるのかわかりませんが、前方の視界が見えなくなるようなものではなく、今のところちょっと青空が重そうだなと感じる程度です。

60歳で留学させていただき現在61歳、当然学生の中にこんな老けた人はいません。「叔叔(おじさん)」と呼ばれることもあります。自分ではあまり違和感なく学生生活を送っています。大学によっては留学年齢を60歳未満と制限している学校もあるようですが、年齢制限のない大学を探せば、60歳定年した後海外留学する事は人生の選択肢としてはありだと思えます。ただ、継続雇用のエスカレーターから一旦降りるともう戻れないのも現実で、あと3か月この留学が終わって日本に帰ったら、何のアルバイトができるのだろうかとも考えることもあります。

留学は若いうち?

留学は学びが多いと感じます。語学はもちろんですが、異文化での生活、そして寮の中でアフリカや中東の人々とほんの少し挨拶を交わすだけでも世界を感じることができます。イベント事では「留学生晩会」(留学生のダンスや歌の演芸会)、バスケットボール大会、サッカー大会など、私は観戦するだけです。留学生の妙な一体感、タイの女の子たちの弾けた応援、若い時に留学したかったなと感じる瞬間でもあります。勝手に私が思っているだけですが、「国とは」「生きていく上での心の強さとは」と考えてしまいます。

日本の若い人にも是非留学をお勧めしたい。できれば学生のうちに1年ぐらいの海外留学。留学には費用もかかりますが、今回のような県の奨学制度があるのは素晴らしいことだと思います。留学することで語学だけではない何かを学ぶことができると感じます。

話は変わりますが、教科書について

いま学んでいる教科書は北京言語大学出版社の「发展汉语」中級口語、総合、閲読の3教科。ここに書かれている内容が大変気に入っています。いろいろな中国に関する文書を読んで中国語だけではない、中国文化や結婚事情や不動産の購入など社会事情、いろいろ中国を感じることができるからです。私が驚いたことは台湾の著者の作品も紹介されている事です。ひとつの中国としては当然かもしれませんが、あまり政治色を感じさせない内容になっています。テレサテンが中国の代表的な歌手として取り上げられ、当時の中国では知らない人はいないと書かれている事にも驚きました。私が見たドキュメントではたしか当時の中国では禁止されていたような。

この教科書の初版は2011年とか2012とあるので、これらの教科書が書かれたのは今から13年以前、もしかしたらその当時の時代背景が関係しているのかもしれない。いま新しい教科書を作成したらどんな内容になるのだろう。

中国の流れは速いです。30年停滞していた日本とは違うドラマチックに変わる中国、そして世界も、日本の尺度で計ると見誤るかもしれないと感じます。

(写真)

1. サッカー大会の様子



2. 中国の楽器を学ぶ「琵琶」 2コマしかないのが残念

以前「胡弓」を教えていた先生は現役を退かれたとの事。口語を教えている先生の専門が音楽(琵琶)だと知って驚いた。先生の演奏は本当に素晴らしい。



3. 口語の授業の中で各国の結婚事情を発表する。

ベトナム、インドネシア、フィリピン、タイ、モンゴル、韓国など各国の結婚事情をプレゼン。離婚は違法、一夫多妻の時代があったなど。知らないことが多く面白い。みんなプレゼンテーションにも慣れていて、学生ってすばらしいと感じる。



以上